① 海老名駅周辺エリア

～　JR・小田急の線路で囲まれた「芸術文化コンプレックス」ゾーン　～

■　北側エリア：

文化会館、中央図書館等を含む、未開発地域を持つこのエリアを、公共文化施設を核として、一帯を一つの芸術文化コンプレックスゾーンと見立て、施設の誘致や開発を行い、個性あふれる多様な芸術文化との出会いを展開することを提案します。にぎわいのゾーンとなるこの地域で、市の持つ潜在的なポテンシャルの高さと、「創造都市」としての魅力を内外へアピールします。

■　南側エリア：

駅から少し離れた南側エリアは、小田急高架下の利用を中心にした展開を行います。地域へ開き、また、参加し創造することができるような、より身近な「創造活動の場」と「機会」を創出します。芸術活動のみならず、経済活動、市民生活を含むあらゆる年齢層の生活の領域に関わるものとして捉え展開します。小学校や多くの集合住宅を含むこの地域で展開する事で、近隣関係に新しいつながりをもたらすような仕掛けを発信していきます。文化をテーマに景観づくりを行い、生活に潤いと豊かさを与えるのはもちろん、充実感ある地域社会の形成を狙います。

② 新結節点エリア

～　海老名S.A.、I.C.と繋がる「地域の窓」ゾーン　～

インターチェンジとサービスエリア、その両方に近接した特殊な条件を活かし、海老名を広域展開する、「地域の窓」として活かす事を提案します。まず、海老名S.A.にスマートI.C.を誘致、開通させ、地域の利便性を強化した上で、同時に、圏央道海老名I.C.と、市の基幹道路との連結をはかり、結節点とするエリアです。

地域産業と高速道路の持つ広域ネットワークを、出入口付近の流通企業の誘致だけに留まらない、高速道路をここにしかない付加価値として地域の活性化に積極的に絡めた事業創造地域を創出します。
たとえば、サービスエリアと、同地域のJAグリーンセンターなどが相互連携し、地元地域の紹介、物産、特産物を全国に展開する地元産業PR拠点として活用するなどが可能です。

③ 縦貫道海老名IC周辺エリア

～　交通・産業・自然の融合した新しい海老名の活力を生み出すゾーン　～

さがみ縦貫道海老名ICが開通したばかりのこの地域は、その利便性から、今後、産業軸が造られて行く事が予想されます。

ICの開通と、その後の産業展開とともに、交通量が増大していくことが考えられます。まずは、地域住民、また、周辺施設を利用する市民に安全で良好な生活動線、利用動線を確保することが必要です。
相模川河川敷、海老名運動公園にも近く、自然環境、運動環境への配慮も必要です。地域住民や既存産業に寄与しながら、産業の展開に伴う雇用の創出に向けた、新たな居住の場としても配慮も必要です。

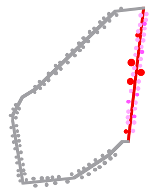
これら、緑や自然との融合を掲げた住環境の整備を優先を掲げた産業整備を行うことで、地域と一体となった生活拠点としてブレの無い、高度な利便性の新しい海老名の市街地形成を考えます。

Ⓐ～Ⓓ 海老名サーキュレーション

～　交通インフラの拠点を同士を結んだ回遊する街づくり　～

インフラ拠点同士をつなぐと、丁度、徒歩20分程度ごとに四つのラインが設定でき、一筆書きでつなぐことができます。各々は歩いて移動できる適度な距離感です。こうしてできた四つの道にテーマを決めて、歩道を整備する事を提案します。意味付けの違う道同士に回遊性を付与することで、住みたくなる、訪れたくなる街の風景とにぎわいを創出します。

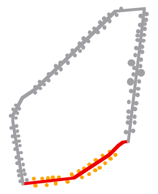
近年の交通インフラ整備にともない交通量も増加します。地域住民の生活動線の安全確保のための、歩行者道路の整備の一環に、街づくりの意味を与えます。



Ⓐ 海老名駅～新結節点　→　官庁街通り

市のメイン道路を官庁街通りとして整備。既存の役所などの他、市の公共機能を通りにちりばめるように集め、桜並木など四季色豊かな、市の基幹道として視覚的に魅力ある道をテーマにします。

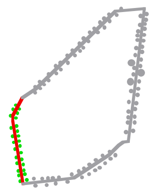
image



Ⓑ 海老名IC～厚木駅　→　沿道産業施設と歩行者分離道路

高速道路インター開通による、交通量増加、産業施設の展開にともなう、地域住民の生活動線安全確保のための、歩車分離の歩行者専用をテーマにした道。周辺には大型駐車場を整備し、コミュニティバスと連動するなど、インターからの市街地への流入に備えます。

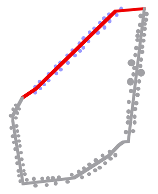
image



Ⓒ 厚木駅～運動公園方向　→　アスリートライン

運動公園、河川敷の環境整備と連動。厚木駅からの徒歩でのアクセス性を考慮した、ランニング、ウォーキングに適した、緑豊かな景観、歩行者空間をテーマにします。

image



Ⓓ 海老名～厚木駅間　→　アート＆コミュニティライン

小田急線のガード下の空間を有効利用した歩行者専用の道路。半屋外空間を大きな「場」として見立て、その先の自然や住民とのつながりをつくる仕掛けと機会を随所に盛り込み、地域活力を伸ばす、感性とコミュニティ創造の道をテーマにします。

image

④ リバーサイド・ハイウェイサイドエリア

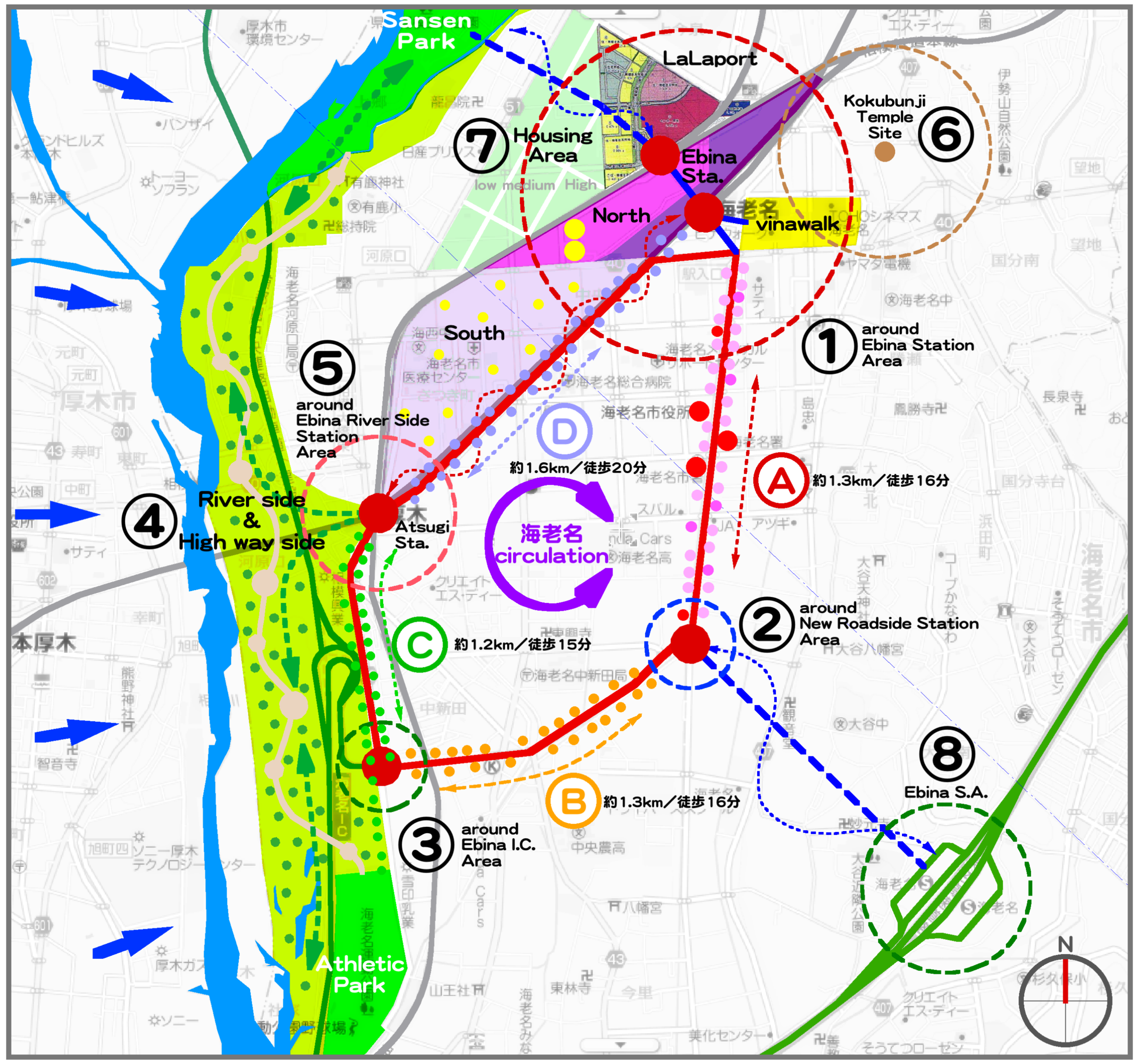
～　人と水、自然と近未来のふれあう親水ゾーン　～

三川公園～運動公園の間の相模川河川敷一帯と、平行する現在建設中の縦貫道路高架下、法面など、高速道路後背地を含めた、新しい土地利用を示すエリアとして整備をすることを提案します。

２つの公園をつなぐ、自然環境を活かした、うるおい、彩り、水辺の拠点、また、観光、スポーツ、レクリエーションの広大な拠点とし、それだけではなく、自然と高速道路を共存共生させ、人、川、道路、これらを革新的、先導的な美しい自然共生の景観として整備することで、海老名市のイメージを新しくかつ美しい街として想起させ、定着させていくことを狙うゾーンです。
自然環境、農業環境との調和、水と緑の機能強化、生物多様性の確保、高速道路があるからこその、地球温暖化の原因となる温室効果ガスの排出抑制、CO2排出削減（カーボンオフセット）、資源やエネルギーの再利用、自然環境の保全や再生による二酸化炭素の吸収源の確保など、これらの環境負荷低減のキーワードや数値、効果などを行政が明確にした上で、それら目標に向け、市民・利用者との協同による水辺環境づくりがポイントとなります。

河川がそのまま隣接市町村との境界となっており、相模川河川敷「市のエッジ」となる地域は、外側から見た市のイメージをそのまま表現する事ができます。他の市との差別化を表現することで、市の先進的特色を造り出す事が可能だと考えます。

image



⑤ 海老名リバーサイド駅（仮）周辺エリア

～　相模川河川敷と繋がる「自然と公園の入口」ゾーン　～

既存の海老名運動公園、また県下で造られた初めての河川公園である、県立相模三川公園、そして、④の地域の提案と伴い、厚木駅周辺地域を全面的にイメージ刷新し「自然と公園の入口」として活かす事を提案します。

厚木駅はいうまでもなく海老名市に存在しています。純粋にそのねじれた状態は、市にとっても利用者にとっても良い状態とは考えにくいため、まずはその名称を海老名市イメージにあったものとするべく、変更を強く働きかけることをすべきと考えます。
その際に、上記の地域整備計画に即した新名称とすることで、名称自体が海老名の新イメージを表すこととなり、駅や周辺市街地と近接する自然環境、これら整備の方向性を、市の内外に明確に示すコンセプトそのものとなると考えます。

⑥ 国分寺周辺エリア

～　「歴史文化の発信拠点」ゾーン　～

相模国分寺跡を中心とした、歴史、郷土文化の発信エリアを整備する事を提案します。

地域が育んできた歴史的、文化的な資源と共に、相模丘陵の緑豊かな高台の地形を活かした景観、眺望の場の整備をすすめ、この地域に集中する史跡や神社仏閣巡りの案内を市民、観光客に向けて行います。

ただ整備するだけではなく、老若男女が楽しめるよう、徒歩はもちろんのこと、現在走行中のコミュニティバスや、レンタサイクル（工芸大学提案）などを含めた段階ごとのシステムをつくり、市を周遊しながら郷土文化情報に触れられて、かつ、その行為自体を楽しめるようなエンタテイメント性を付加した演出を造り出すことで、歴史観光資源を埋没させる事なく未来へ保全することに繋がり、人の移動は地域活性化に資すると考えます。

⑦ 西口地区開発エリア

～　良好な住宅地の整備　～

駅前の高層マンションや雑居ビルの乱立は、街並景観や人工流入など問題が多い。ここでは、高～中～低層の各レイヤを設定し、まちなみ形成やコミュニティ形成に配慮した、適切な規模の良質な住環境を持つ集合住宅地を提案します。住民意思不在の投資物件の集中を避ける意図もあります。まちづくりは本来、住む人々によって行われなくてはいけません。

⑧ 海老名サービスエリア

～　スマートインターチェンジの整備　～

海老名サービスエリアに、スマートインターチェンジを誘致、開通させることで、地域の利便性を強化します。将来的にはサービスエリアを休憩するだけの高速道路の一通過地点としてでなく、出入り可能な目的地としてリノベートし、地域住民へも開放することで、相互メリットを生み出すきっかけを創出します。

海老名市　街巡り ／ 街歩きのデザイン構想　～ Design of walking in Ebina ～

え・びな　ゆめづくり まちづくり推進委員会
Com Associates & SAT Architects
2011.01.14